

UK リポート：イギリスの大学における教育改革

—平成14年度学長裁量経費イギリス視察班報告書—

折本 素, 小林 直人, 矢野 博子

UK Report : Educational Reform in British Universities

Sunao ORIMOTO, Naoto KOBAYASHI, Hiroko YANO

愛媛大学では平成14年度の学長裁量経費により、各国の高等教育の実情を調査する視察団を派遣している。著者らは、平成15年3月にイギリスに派遣されてエセックス大学とロンドン大学を訪れ、イギリスの大学におけるFD (faculty development)・SD (staff development) の実情を現地調査したので、ここに報告する。

今回、イギリス視察班に与えられた主たる任務は、イギリスの大学が大学教育改革の取り組み、中でも、いかにして教育の質を高めているかを調査することであった。イギリスでは、高等教育の質的改善のための組織的取り組みを10年以上も前から行ってきた。そのために、大学評価の方法として、第三者機関による外部評価システムを取り入れている。その代表的なものとして、HEFCE (The Higher Education Funding Council for England) と QAA (The Quality Assurance Agency) による評価が存在する。HEFCE は、大学の研究業績を評価する機関であり、QAA は、大学の教育改善の取り組みを評価する機関である。従来、国から大学に配分される予算は、主に HEFCE の評価に基づいて決められていた。当然のごとく、大学の教員の評価も、研究業績を主体に行われてきたし、教員も研究者としての意識が強く、教育面が手薄になる傾向にあった。しかし、ここ数年、イギリスにおいても教育の重要性の再評価が行われ、政府が、教育重視の姿勢に方向修正を行った。それにあわせて、1997年に QAA が正式に発足した。QAA は、教育改善の取り組み評価の方法の第一弾として、カリキュラム、教育方法、学生の学習目標達成度、学生支援サービ

ス、学習支援設備 (図書館などを含む)、教育の質向上のための取り組みの6項目に対して、それぞれ4段階の評価をつけ、24点が満点になる評価方法を導入して、全国の大学の教育評価を行った。この外部評価に対応して、各大学とも教育改革のために様々な取り組みを行っている。

イギリス調査団は、折本素 (大学教育総合センター助教授)、小林直人 (医学部助教授)、矢野博子 (英語教育センター主任) の3名で構成された。エセックス大学ならびに、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所 (SOAS) でのSD (視察したイギリスの大学では、教員に対する取り組みと事務職員に対する取り組みを合わせてSDと呼ぶ) に関しては、3名が共同で調査し、ロンドン大学医学部の一つである King's College London にある King's Institute of Learning & Teaching での教育改革の取り組みに関しては、小林が調査を行った。折本、矢野は、SD の他に、英語教育、並びに、日本語教育の実態も調査した。以下、報告書は、3部に分かれる。エセックス大学ならびにロンドン大学 SOAS におけるSDの取り組みと英語教育 (日本語教育も含める) の報告は折本が、King's College London のSDの取り組みに関する報告は、小林がまとめた。

イギリスでのいくつかの大学・研究機関での視察をまとめると、次のような共通点が浮かび上がってくる：1) SD (FD) に関しては、スタッフへのサポートによって各人の能力を上げて行くという考え方に基づいている。2) 教員個人に対する評価の結果は、いかなる方法によるものであれ基本的に公表せず、排他的な競争のためには使用しない。3) 予

算確保にかかわる外部評価への対応といういわば外圧が、SDの推進の原動力になっていることは否めない。

このレポートを書くにあたり、我々の調査に快く対応してくださったエセックス大学とロンドン大学の関係諸氏に、著者一同厚く感謝申し上げます。

1. エセックス大学： 新興大学における全学的 アプローチ

我々は、まず、はじめに本学と交流協定を結んでいるエセックス大学を訪問した。エセックス大学は、ロンドンより東に90キロほど離れたイギリス東海岸沿いのコルチェスターの郊外にある。学生総数約6,700人、そのうち約1,700名ほどが大学院生である。全学生の40%は留学生で、ヨーロッパ共同体から20%、それ以外から20%程度の留学生が来ている。1965年に大学として正式に認可された新しい大学である。エセックス大学で我々を迎えてくれたのは、アカデミックスタッフと、オフィススタッフ総勢13名であった。

FDと外部評価に対する取り組みを聞きたいと連絡したところ、これだけのメンバーとのインタビューを即座に組んでくれた。(前書きでも書いたように、イギリスでは、教員と事務職員の技能改善の取り組みを、Staff Development:SDと呼んでいた。)その対応の早さと、応対してくれた教官並びに事務官の数にいささか驚嘆した。さらに、13人の内、10名が女性で、きわめて重要な役職を担当しているのも日本の大学との格差、温度差を感じさせるものであった。この中でSyd Kent氏が担当している「機会均等化推進」という考え方は、アメリカでは、既に一般化しているが、日本にはまだ耳慣れないものであろう。これは、性別、国籍、年齢、貧富の差により不平等が生じないように、あらゆる分野に気を配り、機会が均等に与えられるよう改善していく仕事である。この方針は、イギリス政府によって提唱され、エセックス大学では、それに積極的かつ組織的に取り組んでいる。また、エセックス大学は、「国際化を目指す」という建学の方針に則り、多くの留学生を受け入れているが、留学生を受け入れるときも、性別、国籍、宗教、身体的障害、貧富の差など、いかなる理由でも不利益を受けないよう

に配慮を行っている。その結果、120近い違った国籍の学生が存在し、50-60の言語(方言)が使われている。これすべてに対応する教員を配置することは、経済的にも物理的にも不可能である。しかし、できるだけ多彩な教職員を配備する努力は常に行っているし、教員と学生とが学生生活支援グループを作り、様々な学生の悩み相談を受け付ける体制も整備している。具体的に、言語障害を持つ学生をどのように支援していくかというテーマの講座や女性スタッフの技能向上のための講座なども設けられていた。今回、我々の対応をしてくれたスタッフに女性が圧倒的に多かったのも、エセックス大学がこの新しい「機会均等」Equal Opportunityという考え方を積極的に取り入れている表れといえるであろう。

さて、大学を研究重点型と教育重点型の2つのタイプに大別すると、エセックス大学は、その前者に入るそうである。自分の主たる仕事は何かと尋ねたら、多くの教員は、今でも研究であると答えるであろう、と今回話を聞かせてもらった教職員たちは口をそろえて言っていた。確かに研究においては実績もあり、新聞が発表した2001年研究業績評価別全国大学ランキングでは、10位に位置している。しかし、エセックス大学では、教育改善にもきわめて早くから取り組み、1990年には、教職員の職能向上(Staff Development)のための部局を立ち上げた。この部局を中心とした努力のおかげで、1997年以降に行われたQAAの評価では、極めて高い評価を受けた。(QAAに関しては、Appendix 1を参照のこと。)2001年までに実施されたQAAの評価の平均点は、24点満点中22.5であった。経済、システム工学、政治、哲学それにスポーツ科学などの学部では、24点満点を獲得した。その結果、2002年に教育分野における全国大学ランキング表では、エセックス大学は、6位にランキングされた。(以上のランキングは、Times紙によるもの)本来の売りであるはずの研究より教育分野の方が高い評価を受けることとなったのである。むろん、それぞれ評価項目も違うので、新聞発表のランキング表を単純に比べるのは無意味であるが、研究も教育も全国で10位以内に入っているということは、きわめて高水準の大学だと言えよう。

エセックス大学では、教職員の技術、サービス向上のために、組織的取り組みを行ってきた。現在、新任教職員に対する研修はもちろん、既に在籍して

いる教職員が教育技術、管理能力、サービス能力を向上する手助けとなる具体的なプログラムを提供している。たとえば、終日×3日と半日×2日の5日間で行われる新人教員研修では、次のような具体的な目標が達成できるようなプログラムが組まれている。

1. 効果的な教育方法
2. 模範授業の提示
3. 教育目的と目標の立て方
4. 講義プランの作り方並びにプレゼンテーションの仕方
5. 発話の仕方・ボイストレーニング
6. 成績評価の仕方
7. 教材及び教育機器の利用の仕方
8. エセックス大学における機会均等方針の説明
9. etc.

職員に対しても学期毎に行われる新人研修の他に、管理職技能研修なども設けられている。それらのプログラムのテーマの一例を挙げておく。

1. 予算の組み方
2. 雇用者の権利
3. 同僚から管理者へ
4. 人間関係の問題解決法
5. 部下の意欲を高める方法
6. 交渉術
7. 企画の立て方
8. 戦略的思考法
9. etc.

このように、現場での必要性に応じた非常に具体的なテーマを立てている。そして、現場の必要性に基づいたセミナーを組むために、常に、ホームページ上で意見やフィードバックを求めている。Staff Development は、教職員の技能向上を補助するために行うのであって、決して単なる教職員の技能評価のために実施されるのではないという基本姿勢が堅持されていた。このようなセミナーは現在のところ、自由受講制を取っているが、数年内に、全教官に必修化することを検討している。特に新任教職員の研修は義務化の予定である。

QAA に対しては、1997年に最初に査察を受けた学部の取り組みを参考に、対応方法を他の学部に徹底している。今までの QAA は、事前に査察時期及び、査察内容が分かっていたので、対応策を練っておけば十分良い評価を得られるようだ。研究に比重

を置き、教育には余り興味を持たない研究者タイプの教員が多いにも関わらず、対策をうまくとれば、教育評価で好成績を残せるとのことであった。これは、外部評価の限界を示すものと言えよう。QAA による外部評価には、実際の授業の視察も含まれたが、多くは、書類審査で行われた。いずれも、その教科の専門家たちによる審査であった。この書類審査のための準備に膨大な時間を取られるのが QAA の問題点だとエセックス大学のスタッフは指摘していた。この点は、QAA 自体も認識しており、今後は、個々の教員の取り組みや、個々の授業のレベルを調べるのではなく、大学が組織全体としていかに授業の質を確保し高めていく努力をしているかを調べる方向に方向転換しようとしている。この Institute Audit と呼ばれる QAA の新しい審査をエセックス大学は、2003年10月から11月に受けるそうである。しかし、新しい制度でも、やはり書類による審査は避けられず、そのための書類づくりに時間や労力を取られるのは避けられそうもないようだ。

教育改善のために、エセックス大学でも学生による授業評価が行われているが、今までは、そのアンケートは大学側が主体となって行われてきた。学部により質問内容は若干違うが、基本的に、愛媛大学で現在行っている学生授業評価アンケートと同じような項目があげられていた。基本的には、授業期間中に教員がアンケートを配付し、回収後、学部やコースの長に提出される。この結果は、学部長及びコース長と教員本人にしか知らされない。あくまでも、個々の教員が授業を改善する手助けのためという趣旨に則り、個々の教員および回答してくれた学生のプライバシーは守られている。問題があると思われる教員及び手助けが必要と思われる教員には、その教員が所属するコース及び学部の長が、個別に指導を行う。エセックス大学の場合、ほとんどの教員が、良い授業を行いたいと考えており、万一指導を受けた場合は、積極的に Staff Development の企画に参加して、授業改善を行っているようである。まだ、全教員に、授業改善の必要性が浸透しているわけではないが、外部評価という外圧をうまく利用して、Staff Development の部局を中心に、個々の教員の意識改革を普及させようと努力がなされている。

事務局長である Tony Rich 氏は、QAA や HEFCE の結果が大学評価の全てではないと言いながら、そ

こでよい結果を取ることが、国からの予算を保証してもらうために必要条件であり、また、同時に、良い学生をたくさん集めるのに効果的であると述べた。今後ますますその傾向は強くなるだろうという予測も語ってくれた。ただ、現在の受験生は、都会志向が強いので、生活費が比較的安い都会、たとえば、ノッティンガム、シェフィールド、マンチェスター、バーミンガムなどにある大学に進学したがる傾向があるとも Rich 氏は語った。この選択は、必ずしも、QAA や HEFCE など評価と一致しない場合もあるそうだ。また、医学部などでは、QAA や HEFCE の結果に関わらず、経済的事情で、地元の医学大学に通う学生が増えているという事態が生じているようである。Rich 氏は、エセックス大学は、常に似て非なるものを狙っているとも語った。個性化を打ち出して、大学競争に勝ち抜こうとする姿勢は、パンフレット表紙のイラストの描き方一つにまで表れている。エセックス大学は、大学のホームページにも力を入れており、わかりやすく、詳しい情報が盛り込まれている。また、連絡先にコンタクトしたときの対応も実に迅速である。このあたりも SD の効果であろう。PR を重視している大学だという印象を得た。

エセックス大学の英語教育に関しても、簡単に紹介しておく。エセックス大学には、英語教育センター (English Language Teaching Centre) があり、次のような様々なプログラムを提供している。

1. 英語教員のためのプログラム (9ヶ月)
 - a. Diploma や Certificate を取るための特別プログラム
 - b. Master コース
2. 入学生のためのコース
 - a. EAP (English for Academic Purpose) コース

英語専攻以外の学部および大学院の入学生に必要なアカデミック英語を教える9ヶ月コース
 - b. 入学準備コース (Pre-Sessional Course)

10月入学を認められたものの、そのままでは、大学の授業についていけないと判断された入学予定者たちに大学の授業に必要なレベルの英語トレーニングと専門科目の予備演習を複合的に行う。レベルに応じて、6ヶ月コース (TOEFL 480点以上)、12週コース (TOEFL

500点以上)、8週コース (TOEFL 520点以上)、4週コース (TOEFL 540点以上) の4コースが設けられている。

- c. 学期内英語補助プログラム (In-Sessional Language Support Programmes)

エセックス大学の正規学生であれば、いつでも無料で受けられる。英語で論文やレポートを書けるようになるための英語力を養成するとともに、文献検索や、論理的思考法育成の手助けもするプログラム。

- d. 大学進学予備コース (Bridge Year)

大学進学レベルに達しない学生に、大学入学資格を満たす学力を付けるためのコース

3. スカンジナビアや日本の中高の英語教員向け英語力向上特別プログラム

いずれのコースも週20時間程度の授業と、相当量の宿題が課される。これらのコースを実施するために、専任9名、非常勤講師10-12名が配置されている。この他に、プログラム毎に、17人から25人の特別非常勤を雇っている。これらの教員を指揮しているのが英語教育センター長の Sandra Cardew 氏である。彼女によると、エセックス大学英語教育センターでは、非常勤を専任と同様に扱い、英語に関する会議の議事録は、全員に回覧し、非常勤講師にも会議への参加を促している。非常勤の会議への参加は、任意であり、基本的に、会議の出席に対して賃金が払われることはないが、共同体意識を持ち、教育方針を徹底してもらうために会議への参加を促している。コースの方針を決めるための会議だけは、常勤のみで行っているが、その決定内容は、全ての非常勤講師にも公開している。会議は、必ずしも合議制を取っていない。最終決定権は、英語センター長にあり、センター長は、できるだけ全員の意見を聞きながら、最終的には、自分の案を提示し、その案を進めていく理由を説明し、メンバーに納得させる責任と権限が付与されている。予算に関しても、センター長の裁量で自由に使える額が認められており、非常勤でも会議での貢献度が高かった場合には、謝金を支払うことができる。

最後に、愛媛大学とエセックス大学の学生交流協定を再活性化させるためにどのようなことが必要か意見交換を行った。まず、単位互換できる授業を増やし、交換留学生に対しては、留学期間中の学費を免除するなどの工夫が必要であろうという意見が出

た。エセックス大学では、毎年、一定数以上の学生を送り込んでくれる大学に対しては、授業料の割引制度などを持っているそうである。留学生用の宿泊施設に関しては、学内およびキャンパス近郊に100%確保している。また、学内で学用品のみならず生活必需品が全てそろおうようになっている。銀行はもちろん、郵便局や理髪店まで学内にあるのは、郊外に位置する大学だからこその配慮であろう。愛媛大学にもっと多くの留学生を受け入れるためには、宿泊施設を確保することと日本語教育を中心とした単位互換ができる授業をできるだけたくさん提供することが必要であろう。愛媛大学から学生を送り出すときの最大の問題点は、イギリスの大学が要求する英語力の高さである。エセックス大学の場合、TOEFL 550点未満の学生には、その英語力に応じて6ヶ月から4週間までの様々な入学準備コース (Pre-sessional Course) が設けられているが、TOEFL 480点はないとこのコースにも入れない。(TOEFLに関しては、Appendix 2を参照のこと。) 後述するロンドン大学では、無条件入学には、TOEFL 637点以上なくてはならない。TOEFL 560点以上有れば、入学準備コース (Pre-sessional Course) に入れるが、これより低い場合は、エセックス大学のBridge Yearと同じFoundation Courseに入り、1年間英語力を鍛えることになる。ただし、このコースに入るのさえ、TOEFL 540点以上必要と明記されている。イギリスの大学に留学を考える学生は事前に大いに英語力を高めておく必要がある。もし、愛媛大学が学生交流を勧め、留学生を海外にたくさん送り出したいと考えているのであれば、それを支援するための英語力養成プログラムを学内で設置することも検討すべきであろう。

付録として、エセックス大学の収入比例を記しておく。

1. 国からの補助金
23,078,000 pounds (約46億円)
2. 入学料など
19,213,000pounds (約38億円)
3. 研究助成金・後援費
10,376,000pounds (約20億円)
4. その他運営収入
14,649,000 pounds (約29億円)
5. 寄付・投資
1,135,000 pounds (約2億円)

このうち、1の国からの補助金は、14,651,000 poundsが教育費、6,590,000 poundsが研究費で、ここにも国が教育に比重をかけてきていることが表れている。

2. ロンドン大学・東洋アフリカ研究所 (SOAS)

エセックス大学に引き続き、我々は、ロンドン大学 SOAS (School of Oriental and African Studies) を訪ねた。SOASは1916年に創立された、比較的長い伝統を持つ学科である。SOASで学ぶ学生は、現在、約3,000人で、ロンドン大学の中でも最も小さな学派(学科)の一つである。しかし、その内1,500人が大学院生であり、しかも、全学生の3分の1は世界中の90-100の違った国からの留学生である。この意味では、エセックス大学同様、SOASも国際的な学科と言っていいであろう。このSOASで我々を迎えてくれたのは、次の4名であった。

Professor Michael Coxall :

留学生基礎コース英語研究
モジュラーコース コース長

Professor Desmond Thomas :

留学生基礎コース英語研究
教職員技能向上コース主任教師

Mr. Keith Webster :

SOAS 情報企画室長

Ms. Kazumi Tanaka :

日本語学科主任教員

我々は、まず、Coxall教授から、SOASが留学生に提供している様々な語学基礎コースの説明を聞き、その後、実際の授業をいくつか見学させてもらった。SOASでは、アジア・アフリカ研究を専門とする研究者(専門教育を担当)260人に加え、語学専門の教員 Language Teachersを相当数任用している。Coxall教授が所属する部局は、特に外国からの留学生の英語能力を入学レベルにまで上げるための補習コースを担当する部局である。SOASは、入学生にかなり高度な英語能力を要求する。具体的には、学部は無条件入学できる英語レベルは、TOEFL 637点以上である。最低入学条件は、TOEFL 560点である。しかし、この場合、正規の授業が始まる前に、4週間から8週間のPre-sessional

Courseを修了することが条件となる。英語力がTOEFL 560点に満たない場合は、1年間 Foundation Programmeで英語力を高めてから改めて入学願書を出さなくてはならない。Coxall教授が所属する International Foundation Courses and English Language Studies (IFCELS)は、このような Pre-sessional Courseや Foundation Programmeを提供している部局である。IFCELSでは、次のようなプログラムを提供している。

Undergraduate Foundation Programme for Humanities, Social Sciences, Law and Business

文系学生のための基礎学力養成コース(10ヶ月)である。1985年から続けられている定評のあるコースである。入学後の専門コースにあわせた講義と、専門用語学習まで含めた語学コースがうまく組み合わされている。EAP (English for Academic Purpose)と専門分野の模擬授業が体験できる。卒業生は、卒業成績に応じてであるが、SOASをはじめ、イギリスの大学の入学資格を得られる。TOEFL 540点以上あれば入学試験と面接を免除される。

Undergraduate Foundation Programme for Science & Engineering

理系学生のための基礎学力養成コース(10ヶ月)である。2002年から始まった新しいコース。文系の基礎学力養成コースの成功に基づき新設された。卒業生は、イギリス大学の入学資格を得られる。このコースも TOEFL 540点以上の英語力が必要。

Contemporary International Studies : a flexible programme of academic and language study

大学院進学を目指しているが1年間の長期プログラムには参加できない学生や、海外の大学での研究を卒論に生かしたいと思っている学生、語学学校よりアカデミックな雰囲気英語を学びたいと思っている学生などを対象にしたコースである。3つある学期のうちどれに参加してもかまわない。もちろん、すべて参加することも可能である。学部生用と大学院生用の2つのレベルに分かれている。

- 授業は、ある一つのテーマに関して、academic

lecture (1 hour) → lecture review (2 hours) → lecture discussion (1 hour) → writing skills (2 hours) → case study (1 hour) → seminar (1 hour) という順に8時間がセットで行われるのが特徴である。専門的なテーマを学びながら、英語のすべての機能を総合的に伸ばすことをねらっている。

Diploma in English for Academic Purposes

イギリスの大学に進むために必要な英語力を養成するためのコース(9ヶ月コース・1週20時間) 英語の語彙、発音、文法を始め、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能の養成を網羅する。さらに、小論文の書き方、資料の集め方、要約や引用の仕方、ノートの取り方など具体的なテクニックも教えられる。一言で言えば、EAP (English for Academic Purpose)の養成がなされる。

Pre-sessional Courses

英語以外の教科の学力がイギリス大学入学レベルに達している学生の英語能力を養成するコースで、9月あるいは10月の入学前、4週間か8週間の間に集中的に行われる。大学で必要とされる英語力(English for Academic Purposes)の養成を行う。大学院生用と学部生用のコースがある。

我々は、Coxall教授の案内で、いくつかの授業も参観させてもらった。どの授業もきわめて少人数で行われ、LLの授業では、教師と学生1対1で行われていた。Contemporary International Studiesの授業では、International Relationsというテーマで、The Critique of Neo-realismという内容のエッセイを用い、英作文の授業が行われていた。英作文の授業なのだが、まずパラフレーズごとの内容把握が丁寧に行われていた。正確にテキストを読み取ること、そして、難しい表現をわかりやすい別の英語表現に言い換えることにより、表現力を増やしていく練習が行われていた。これらの練習の総まとめとして、自分でエッセイの要約を行うという課題が与えられる。英作文の授業ではあるが、その中に意見交換や既に受けた講義の復習なども盛り込まれていて、複合的な授業構成になっていた。受講者には、日本人を含めアジア系の学生が多かったが、活発に

意見が述べられていた。この授業は、Foundation Course の中級以下のクラスだと言われていたのだが、日本の平均的な大学で言えば、このクラスに所属する学生の英語レベルはかなり高いと言える。このような Foundation Course で、英語表現力を補強し、さらに論文の書き方、資料検索の仕方、論理的思考方法、プレゼンテーションの仕方などをみっちり仕込まれてから大学に進めば、大学進学後、スムーズに授業についていけるのは間違いないであろう。

SOAS で提供している英語教育のプログラムは、ほとんどすべて1週20時間の授業時間で構成されている。イギリスの大学では、英語で授業が行われ、討論もレポート提出もすべて英語で行われるのであるから、これは当然のことかもしれないが、愛媛大学が、真に国際社会で、しかも学術レベルで通用する英語力を学生たちに身につけさせようとするなら、SOAS が提供しているのと同じくらいの質と量の授業を提供すべきであろう。そのためには、大幅な人的資源（主として高度な専門性と教授能力をもった教員）の補充を覚悟しなくてはならないであろう。

次に、我々は、SOAS の図書館を案内してもらった。この図書館の充実ぶりはうらやましい限りである。80万冊以上の専門書があり、様々な原語で書かれた primary sources も十分にそろっている。しかも、それぞれの学域分野に専門の Archivist（文書館員）がいて、学生や教員が必要な資料を探す手助けをしてくれる。彼らは、学位を取った専門家で、教育と研究を結ぶためにも必要な人員となっている。この図書館の特徴の一つに Teaching Collection と呼ばれる部屋がある。ここには、授業で紹介された参考文献などが、そろえられていて、すぐに見つかるように配慮されている。ここに集められた参考文献は、貸出期間が厳しく制限されている。最短3時間から最長一晩までである。これは、授業を受けている多くの学生に読んでもらうための工夫である。Archivist は、授業担当教員と密接に連絡を取り合い、常に、この Teaching Collection にそろえる参考文献を入れ替えている。館内にコンピュータ端末はあるが、利用希望者全員が使えるほどではない。利用待ちの列ができていた。学生宿舎からも大学にはアクセスできるが、学内には十分なパソコン端末及び、自習室などのような場所はない。また、

図書館に併設されたブルネイ・ギャラリーも SOAS の特徴を表したものとなっている。このギャラリーはブルネイ国王の寄付によって立てられたもので、アジア・アフリカの文化や歴史を紹介する展示が行われている。この展示は、SOAS で行われている授業と連携が取られ、授業や教科書で紹介された各国の資料を借用してきて展示している。常に「本物、実物に触れてみることの大事さ」を強調している SOAS らしい展示場である。この展示場の屋上には、日本の枯山水を模した小さな庭園も造られていた。2階の回廊では、アフリカに研究調査に出かけた学生たちが記録してきた写真展なども行われていた。

次に教職員技能向上 (Staff Development) 担当の主任教員の Desmond Thomas 氏から、SOAS で行っている SD の具体的な取り組みを紹介してもらった。SOAS では、アンケート調査および授業参観などを行っている。Thomas 氏のいる部局では、主に教員の教育技能向上の補助を行っており、職員の技能向上は別の専門の部局が最近新設されたそうである。授業評価は、学生による授業評価アンケートと、その結果に基づいて SD チームによって行われる授業観察によって行われる。まず、学生によるアンケートであるが、これは、学科毎あるいは授業項目毎に作られる。必要とみなされた場合には、SD チームの Thomas 氏が独自に作ったより具体的なアンケートが行われる場合もある。これらアンケートは、学年末に行われ、期末テストの結果が出るまで誰も見てはならないことになっている。また、このアンケートは、教員各自が授業改善を行うためという趣旨で行われているので、アンケート項目を点数化し、他の教員と比較した表を公開するようなことはない。アンケート結果を見るのは、学部長及びコース長と担当教員だけである。アンケート結果から、問題がある場合、あるいは手助けが必要だと学部長あるいはコース長が判断した場合、Thomas 氏ら SD チームが呼ばれ、助言及び指導が必要と思われる教員の授業参観などが行われる。ただし、これもあくまでも強制ではない。現時点では、ほとんどの教員は、アンケート結果に問題がある場合、SD チームの授業参観及び、その結果に基づく助言を受け入れている。ここで大切なのは、SD チームの仕事は、教員の評価ランク付けではなく、教育技能改善と授業の質向上の実現のための手助けであるとい

うことを全教員に周知させることである。現実には、改善の見込みが無く、努力も見られない教員に対しては、厳しい態度で望むこともあり得ると語っていたが、基本姿勢は、あくまでも手助けを必要とする教員の補助である。

SOASの情報企画室長のKeith Webster氏からは、事務サイドからQAA及びHEFCEが行っている外部評価をどのようにとらえ、どのように対応しているかを聞かせてもらった。Webster氏は、SOASを稀少研究の場と考えているようであった。教育の質を高めていかななくてはならないことは重々認識していたが、SOASの本務は、研究であり、研究の成果を出版することだと考えているようであった。そのためか、QAAよりもHEFCEのような研究評価で高い評価を得ることを重視していた。従来、イギリスの大学は、研究業績で政府の予算配分が決まっていたからであるが、今後、政府の予算は、教育に比重が置かれるようになり、なおかつ、研究費も大規模な共同研究などに比例配分されることが、今年(2003年)出された教育白書に謳われており、SOASなどは、政府からの予算配分以外に、いかにして研究資金を調達するか難しい対応を迫られそうである。1965年に認可された比較的新しいエセックス大学が政府の方針に迅速かつ組織的に対応していたのに比べ、伝統校であるロンドン大学は、教育改革に関してもゆったりと構えている感じであった。Webster氏によると、ロンドン大学では、5年前に始まったQAAに対して十分な対策をとらなかったために、あまりいい評価が得られなかったそうである。しかし、我々に配られた政治学科のQAAの結果は総合点で22点とまずまず良好であった。ただ、カリキュラムや教育方法、学生の学習目的達成度などは、4点満点であるのに比べ、学習支援設備や授業改善の取り組みに関しては3点であり、組織的な取り組みの遅れを反映している。このような評価を受けたにもかかわらず、ロンドン大学では、教育の質を高めることの必要性を認識した上で、QAAからは冷静に距離を置いている。QAAが必ずしも、授業の水準を正しく反映し得ないことを予測していたようである。「QAAは、点取りゲームのようなもので、コツさえつかめば高得点をとれる。しかし、我々は、そんな点取りゲームには参加しない。それに、エセックス大学が、旧制度のQAA評価に対して用いた戦略はQAAの新制度には通用しな

い。」と言い切っていたのが、きわめて印象的だった。事実、QAAは、第一期の評価が一巡りしたところで、その成果を自己点検し、旧制度の問題点を整理し、今年度から大幅な方向転換を行い、新方式に切り替えた。

比較的新しい大学であるエセックス大学と伝統校であるロンドン大学での教育改革に対する取り組み方の違いが浮き彫りになったという意味で、今回のイギリス視察は非常に面白い結果が得られた。

Webster氏からいただいた年間収支報告書によると、SOASの予算の出所は次のようになっている。

1. 国からの補助金
10,957,000 pounds (約22億円)
2. 入学金など
15,206,000 pounds (約30億円)
3. 研究助成金・後援費
2,131,000 pounds (約4億円)
4. その他運営収入
3,501,000 pounds (約7億円)
5. 寄付・投資
1,113,000 pounds (約2億円)

このうち、1の国からの補助金は、3,611,000 poundsが教育費、3,964,000 poundsが研究費で、SOASでは、まだ研究に比重が置かれている。SOASで特異なのは、マイノリティ(少数民族文化)研究に1,845,000 pounds、図書館、博物館、特別画廊などに1,137,000 poundsが国から配分されている点である。他では余り研究されていない研究分野、及び、充実した図書館の維持管理に予算が配分されていることから、SOASは、国から特殊研究機関として特別扱いされていると言えるかも知れない。しかし、先にも述べたように、今後は国からの補助金は教育分野に比重がより高くなるため、SD部局を中心に対応策を進めていかななくてはならないであろう。

最後に、日本語教員のKazumi Tanaka氏から、SOAS日本語学科で日本語教育をどのように行っているのか説明を受けた。

SOASの日本語学科では、1年次に集中的に日本語を教える。学生が学ぶのは、初級日本語(3単位)だけである。2年前までは、1学年20名が定員だったが、より多くの学生に高等教育の機会を与えるという政府の方針に従って、現在は40名に倍増している。学生は、1週間に50分の授業を14回受講する。

1年間に23週授業がある。つまり1年間に16,100分、およそ268時間、日本語の語学だけを集中的に学ぶことになる。むろん、授業だけでなく、相当の宿題および予習復習が必要となる。これは、2年次以降の授業の基礎となるもので、卒業要件ではあるが、卒業成績判定には含まれない。イギリスでは、3-4年次（3年で卒業できる学部では、2-3年次）に受講する専門の授業だけで、大学在学中の成績が判定される。SOAS日本語学科の2回生は、全員、日本の提携校に1年間留学し、そこで指定された単位を修得することになっている。帰国後3-4年次に、文学や歴史の授業を受け、最終試験に臨むことになる。1年次に1週14コマの日本語の授業を取らせているのは、SOASだけで、イギリスで日本語を教えている6大学（Oxford, Cambridge, Edinburgh等を含む）の中で最も厳しいコースといえる。

SOASで日本語語学の授業を担当しているのは、すべて日本人教師である。しかし、入学学生の半分から3分の1は、全く日本語を学んだことがない学生であることもあり、授業を全て日本語で行うわけではない。必要に応じて、英語での説明を加えている。媒介語として英語を使う方が効率的だと語っていた。また、専門の授業はすべて英語で行われ、レポートも英語で書くことを要求される。従って、日本語学科への入学生でも、TOEFL 580点以上の英語能力を要求される。SOASでは、卒業生には、英語と日本語の両方の能力が備わっていることを目指しているのだ。卒業生は、イギリスの日系の企業や、日本の外資系の企業に就職することが多い。そこでは、日本語から英語、英語から日本語へと翻訳する能力が必要となる。従って、SOASでは、1年次から翻訳の授業を取り入れている。

数年前まで、語学の授業は、1クラス5名程度の少人数クラスで行っていた。しかし、イギリス政府が、18歳から30歳までの総人口の50%を大学に受け入れるという方針を出してから、各大学とも定員を増やさざるを得なくなり、SOASでも20名程度だった定員を40名に増やすことを強いられた。しかし、それに伴って、教室も教員も増補されなかったため、1クラスの人数は増え、教師の授業担当コマ数も増えた。それでも現在、1クラス15名程度までに押さえる努力がなされている。

イギリスの大学では、現在、外部試験官(External

Examiner)の制度を取り入れている。これはきわめて厳格な成績評価に役立っている。まず、授業担当教員が1年間の授業の終わりに最終テストを作成する。そのテストが適正であるかどうかを同じ学科内の同じ専門分野の教員が審査する。適正だと判断された場合、学科全体の会議で再度、チェックを受ける。その後で、他大学の同じ専攻分野の教員に、このテストの適正さを再度審査してもらう。合格となって初めてテストが実施される。外部試験官は、このテストの採点も審査する。まず、授業担当教員が明確な判定基準のもとに、テストを採点する。同時に、同じ学科内の別のもう一名の教員が、授業担当教員の採点結果を見ないまま、同じテストの採点を行う。両者の採点に大きな隔たりがある場合、両者は協議して、採点を修正しなくてはならない。両者が最終的に出した採点結果は、外部試験官に送られ、その採点が妥当であったかどうか判断される。このとき、外部試験官は、自分の大学で行われている同様の授業の授業内容、及び、それに対するテストなどと比較した報告書を書いて、相手大学に提出しなくてはならない。こうすることで、授業担当教員の主観が極力入らない、公正で厳正な評価が行われる。同時に、大学間で類似した授業の内容やレベルに関する情報交換が行われ、結果的に授業改善に役立っている。

Tanaka先生は、学生による授業アンケートに関しても面白いコメントをくれた。学生アンケートは成績評価が出された後に開封されて学部長、コース長、そして授業担当教員へと順次降りてくるので、すぐに次の学期の授業改善には役に立たないことが多いそうだ。なぜなら、学生評価の結果を見る頃には、もう既に次の年度の授業が始まっているからである。それと、学生たちは、授業ごとにアンケートが行われるので、アンケートに答えるのにうんざりしてしまうこともあるようだ。必ずしも真剣な回答が返ってくるかどうか、つまり、どこまで学生アンケートが有効なのか少し疑問もあると語った。これは、愛媛大学のアンケートでも同じことが言える。エセックス大学でも同じ問題を抱えていた。

3. ロンドン大学・教育学習研究所 (KILT)

KILT (ロンドン大学, King's College London,

King's Institute of Learning & Teaching) のオフィスは、テムズ川を望む大学のビルの9階（イギリスでは8th floor）にある。インタビュー当日（3月12日）はあいにくの天気、午前中は冷たい雨が降り肌寒かった。地階の受付からオフィスに連絡が入っていたため、Dr. Gill Nicholls 教授は報告者（小林）を、エレベーターの前で暖かく出迎えてくれた。Nicholls 教授は知的で物静かな印象を与える“英国レディ”である。開口一番、お互いにファースト・ネームで呼び合ひましょう、と呼びかけてくださり、その場の雰囲気をまたたく間に和ませる魅力を持っている。しかし話を聞くにつれ、彼女のアグレッシブな内面が徐々に明らかとなった。

KILT は、King's College London (KCL) の医学歯学教育研究室を母体としているが、大学の組織改編のために母体であった研究室は閉鎖され、今ではKCLの高等教育に関する研究を扱う独立した研究センターとなっている（KILTとはスコットランドの男性用巻きスカートにひっかけたネーミングである）。現在、KCLの10学部全て（いわゆる文系と理系の双方を含む）をその活動対象としているだけでなく、ロンドンを中心としたイギリス全土の幾つかの大学とも協力関係にある。その設立目的は、KCL全学における高等教育の質 Quality of the Higher Education を高めることである。また、教員だけではなく事務系職員もトレーニングの対象としているが、特に教員の教育の質（高等教育に関する研究の質）を高めることを professional development と称している。

KILT の（あるいは Nicholls 教授の）戦略は独特であり、例えばエセックス大学におけるFDについての考え方とは一線を画する。すなわち Nicholls 教授によれば、KILT は高等教育のサポートのための“サービス”を提供する機関ではない。KILT はあくまでも高等教育に関する研究のための機関であり、5年以内にHEFCE（イギリスにおける高等教育予算の配分の評価機構、研究面を評価する）評価で「5*（＝最高点）」を取ること、すなわちイギリスにおける高等教育研究のCOEとなることが、Nicholls 教授と彼女のスタッフに与えられた“ミッション”である。このために、KILT はKCLの各学部の教育面でのコアとなるスタッフらと共同研究を行い、「5*」クラスの学術雑誌に論文を投稿・発表して行くことを主要な活動と位置づけている。

Nicholls 教授は彼女のスタッフ（所長自身を含めて現在3人＋事務職員、教育学を専攻した教官スタッフが多数）に対し、研究をして成果を発表することを、常に強調しているという。

Nicholls 教授によれば、この戦略こそが、KCLにおいてKILTの活動がポジティブに評価され、受け入れられた秘訣であった。KCLも研究重視の大学である以上、スタッフの間には「研究重視（医学部や歯学部では臨床も重視）、教育は“二の次”という雰囲気が根強い（いずこも同じである）。その様なスタッフに対し、KILTの活動は“アカデミック”な研究活動なのです、我々と“アカデミック”な共同研究をしましょう！と粘り強く繰り返し訴え、かつ学術研究論文という形で結果を出すことによって、受け入れられ支持されるようになったということである（それはもちろん非常にストレスフルな仕事であり、いまだに終わっていない、ということではあるが）。

KILT が（あるいは Nicholls 教授が）KCL全体にそのポリシーを理解してもらいまたその活動の趣旨を受け入れさせたのは、組織の中の上と下からの双方向からのアプローチによる（徳島大学でFDに取り組んでおられる森教授の唱えるアプローチもこれと同じであることは、注目に値する）。現在、その間の層、すなわち Senior Lecturer (教授レベル) に対しては対応が調っておらず、彼らのなかにはKILTのやり方に反対する声もある。そのような中間層に対する戦略は今後の課題であり、来年以降TLF（後述）で対応する予定とのことである。

また、医学部（や歯学部）では他の学部とは「教育」の意味するところが他の学部とは異なる部分があり、特別の対応メニューを作る用意をしているという（学生教育だけではなく、先輩医師から後輩医師への教育なども包含するため）。

【対トップ戦略】

“トップ”とは、KCLの中の各学部長クラスのスタッフのことである。このために、KILTは「Teaching Learning Forum」(TLF)を用意している。トップレベルのネゴシエーションでは、実際にいかに彼らと話を進めるかについて各段階ごとに非常に細かく注意を払うことが重要であったという。まず、非常に丁寧な書き方の招待状を各学部長に送り、集まった学部長を前にイギリスの高等教育、特にその外部評価と予算配分システムについて

の現状を説明し、意志疎通に不足があれば会の後で個々に話し合っただけで説得したという。特に、QAA（イギリスの高等教育の質を評価する外部機関、なお日本の国立大学評価・学位授与機構 NIAD は明らかにこの QAA のシステムを取り入れている）による評価が直接大学の予算配分に影響することを強調した。ただし、それを脅迫的に利用したのではなく、あくまで“紳士的（淑女的？）”に、KILT の活動は高等教育に関する研究なのであって、最終的には学術研究の成果という形で皆さんのためになるのです（“It is for you!”）、と説いたということである。ほとんどの学部の学部長がこれに賛同しているという。

ただし、学部長によって“温度差”はある、ということも明かしてくれた。例えば、KCL の歯学部は外部評価の成績が非常に高い（QAA 評価が24/24、HEFCE 評価が5*：すなわち、教育面・研究面ともに満点である）が、そこでは学部長が改革に熱心で KILT の活動について良く理解し非常に協力的に行動してくれたという。反対にある学部では学部長の考え方が“古く”、自分のスタイルを変えようとしませんが、この学部の外部評価の成績は高くない。

【対フレッシュマン戦略】

イギリス政府の新しい「White Paper（白書）」によると、イギリスでは2006年から新入教員に対する教育法のコースが必須となる模様である。これに先立ち、KILT では既に新入教員に対する教育法の実践コース（後述）を提供している。現在は希望者を対象としているが、全ての学部から参加者がある。参加の理由は、自らの教育の質を高めたいという者から、上司に指示されたので、という者まで様々である。

報告者（小林）は Nicholls 教授の好意により、実際に PGCAP のセッションの一つを見学させて頂いた（活発な議論にこちらの英語力がついて行けず、内容の理解はあまりできなかったというのが正直なところであるが）。終了後に参加者に質問したところ、講義にすぐに役立つ内容も多くてためになる、という感想が返ってきた。ただし、中には、コースに出席するものの自分のキャリアに役立たないとして否定的な意見を述べる参加者もいるという。実際に見学したセッションでも、参加者から、「自分はこのコースに参加して良かったと思っているが、同

僚に勧めるためにはそのメリットを説明することができない。給料や昇進は研究業績によって評価されるからだ（医学部から参加）」という意見が出ていた。これに対し講師は、「教育白書の内容や QAA の姿勢、また2006年にはこのような研修が必須になることから、今後給料の査定や昇進に教育評価が取り入れられるのは間違いない。そのためには“良い Teacher であること”が肝心で、KILT で PCGAP を取得することは悪いことではないですよ」と諭していた。報告者の感想だが、この点での議論は平行線だったようだ。ただ、3時間のセッションのなかで講師が「QAA がこうだから」という話のもって行き方が多かったようには感じた。見学したセッションに限っては、QAA からの“外圧”を参加者のモチベーション向上に利用しているのは確かなようである。

KILT でのインタビューとセッションで感じたのは、「全ての教員は良い Teacher になりたいと思っている」あるいは「全ての教員は良い Teacher になれる」という認識が出発点だ、ということである。これは、イギリスで FD に携わるスタッフの間では共通の認識なのかもしれない。SOAS（ロンドン大学の別のカレッジである UCL 所属の一研究所）やエセックス大学でも、同じことを聞いたからである。また、各教員に関しては、評価（特に、悪い評価）をするのではなく「サポートを提供する」という姿勢が貫かれている。さらに、教育活動によって研究活動のレベルも上がる、研究によって教育のレベルが上がる、と認識されている。Nicholls 教授は、自らの体験談を例にとり、教育によって自らが学ぶ、ということを説明してくれた：「ある外科の教授が、私に手術の様子を詳しく説明してくれた。素人の私にも手術の現場が手に取るように分かるのもであった。彼は他者に説明することで、自分の手術をより深く理解できるのだという」。

KILT の研究資金としては、ロンドン市内にある KCL 附属の3つの大学病院に贈られた“慈善資金”（GKT-charity）などからも補助を得ている、ということである。

☆以下、KILT の活動内容を箇条書きで紹介する：

- 高等教育に関する研究
 - 各学部との共同研究の形を取っている。
- フォーラム
 - Teaching Learning Forum (TLF)、経験の

長い教授レベルを対象, 年間6回

●セミナー (コース)

終了すると対応する「資格」を取得することができる。

教育スタッフを対象としたコースと TA スタッフを対象としたコースとがある。

◎Masters in Academic Practice (MAP):

教育スタッフを対象, 3段階 (PGCAP, DipAP, MA) からなる。

PGCAP=Postgraduate Certificate in Academic Practice

DipAP=Postgraduate Diploma in Academic Practice

M A=Masters in Academic Practice

PGCAP はセミナー形式の講義が31時間+自己学習が200時間

全5コース (イントロと, 3時間ごとのセッション合計10回とからなる)

DipAP は全2コース (各コースは3時間ごとのセッション6つからなる)

MA のコースでは KILT スタッフの直接の指導によって研究活動を行う。

◎Graduate Certificate in Academic Practice (GCAP):

TA レベルを対象, セミナー形式の講義が27時間+自己学習が73時間

7つのコア・コースと4つのオプション・コース (二つを選択) からなる。

1つのコースは3時間+自己学習, コースの他にポートフォリオの作成など。

コア・コースの全てを4日間で履修する集中コースもある。

●カリキュラムの改革

各学部のカリキュラムの改善に関してサポートしている。

例えば, “医学部の微生物学の実習を顕微鏡を使わないものに変える” などの試み。

●講義の observation (peer-review)

評価の結果は “confidential 秘密” 扱い, 上司には各教員の名前を伏せて公表する, トップにも個人は特定できないが, どの研究グループの評価が高いか低いかは分かる。

→評価結果が改善へのモチベーションとなることを目論んでいる。

→低い評価の教員に対してネガティブな対処をすることはしない!

●トップ (学部長) レベルのネゴシエーション

●対外活動 (他大学やその他の学術機関との交流・共同研究)

☆報告者 (小林) が見学したセッションは, 以下のような内容で行われた:

参加者: 17名

KCL の全ての学部 (10学部) から参加, 20歳代から40歳代, 男女半々

テーマ: 「学生の成績評価, 様々な評価方法と評価が学習に与える影響」

講習の流れ:

1. 講習の目的や概要についての短い講義 (10分)
2. 参加者に対して講師が質問し, キーワードを出させる (10分)
3. 配付物と OHP を利用して講義 (10分)
4. 4つのグループに分かれてグループワーク (20分)

「どんな評価法を用いているか? それは何故か?」など

5. 講師を交え, 参加者全員で討論 (40分)
6. コーヒーブレイク (15分), ただし配付された論文を読むという課題付き
7. 講師を交え, 論文の内容について参加者全員で発展的に討論 (60分)
8. グループワーク (10分)

「成績の評価に被評価者である学生を参加させられるか?」

9. 講師によるまとめ (5分)

(最後はやや時間不足で話を急いでまとめたという印象である)

4. ロンドン大学・医学部: 質問票による Q&A

今回の視察に先立ち, 訪問先の各施設に事前に電子メールにて質問票 (参考資料として添付) を送り, こちらの意図を伝えておいた。このうち, ロンドン大学 KCL (King's College London) 医学部 Guy's Hospital の Dr. Helen Graham 教授から詳細なお返事をいただいた。Graham 教授は, KCL 医学部に

における4年次（ほぼ通年で臨床実習を行う学年、日本の医学部の5年生に相当）のカリキュラムに関する責任者である。ここに心から謝意を表すると共に、和訳（折本と小林による）を掲載させていただく。なお今回用いたアンケートの原文（英文、和文）については、著者らにご照会いただきたい。

＜KILT など教育の質向上に携わるスタッフについて＞

* 教育支援部門のマンプワーは十分だと思いますか。

（要約）現在、教育専門の教員が3名いるが、医学部から KILT への組織統合に伴って、これが1名に減らされる。KILT は KCL 全体を視野に入れているため、医学部の約400人の臨床系教員に対してサポートを提供するには、不十分である。

＜外部評価自体について＞

* 次のような対象が外部評価をどのように受け止めているか調査をしていますか。

（学内の教職員に対して）（入学生に対して）

（学生の就職先に対して）（国民全体として）

正式な調査はしていない。QAA の評価結果は Web 上に公開し、同時にプリントしたものを基礎系や臨床系、病院を含む全てのスタッフに回覧して意見を求めた。学生は、“Student Education Committee” (SMEC) という組織が、QAA 調査結果について話し合い、意見をフィードバックすることになった。

* 外部評価のメリットとデメリットを教えてください。

メリット：教授方法、授業の構成や組み立て、その評価システムなどに対して、厳正な評価を得ることが出来る。我々はこれまでよい評価を得ており、このことが医学部全体で教育改善に対する士気を高めることに役立っている。QAA の審査員からは改善のために有益な助言を得られた。

デメリット：QAA の調査に対する準備にかなりの時間、労力、費用がかかる。単なる数値比較では正確な結果がはかれない。学部用の授業と大学院用の授業によっても差がある。

新しい QAA の視察では数字による評価は用いず、大学が提供した情報の信頼性や教育の質の改善過程の信頼性を以下の三段階で評価する：
広く信頼できる・一部信頼できる・信頼できない

* 今までに QAA や HEFCE から、改善の必要ありと指摘されたことがありますか。あれば、それはどんな点ですか。そして、どのように改善しましたか。

1-2 回生の基礎医学系の授業で、内容を削減した。一部は講座が自主的に軽減したが不十分であったため、カリキュラムをシナリオベース（症例ベース）学習に改編した。結果として、必須的なものと必須でないものを分けて選択制にできた。この新カリキュラムは2003年から実施予定で、現在試験的に導入中。

* QAA や HEFCE の評価対象は組織単位でしょうか、それとも個人の教員レベルにまで及ぶのでしょうか。

2000年に行われた QAA の調査訪問では、個々の教員の授業の進め方も視察されたが、基本的には組織としての評価が中心である。今後、個人評価が行われる予定はなく、QAA は各大学などの組織で行われる教員の相互授業評価（peer review）の結果を尊重することになるだろう。

* QAA や HEFCE の評価に対する対応マニュアルはありますか。よりよい評価を受けるためのガイドブックなどが有れば、参考資料としていただきたい。

あります。2002~05に行われる次回の QAA の調査は Institutional Audit と呼ばれる新しい方式で、個々の学部や学科の取り組みではなく、大学全体として授業の質を高めるためにどのような方法をとっているかを調べることになる。また、大学が公表する授業科目の情報が正しいかどうかの評価を行う。その基準は、QAA の web site で参照できる。

* QAA や HEFCE の報告書にどれくらいの影響力があるのでしょうか。評価が悪かった場合には、どのくらいの期間の間に改善を行わなくては行けないのですか。

前回の調査では、改善期限は示されなかったが、次回からは、3年以内に指摘された項目を改善しなくてはならないことになっている。ちなみに、GMC は12ヶ月以内での改善を要求した。

* 改善を行わなかった場合、単位認定期間としての資格を剥奪されることもあるのでしょうか。

授業が十分な基準まで改善されなかった場合は、補助金がなくなり、その授業あるいは、その組織自体が閉鎖に追い込まれる。しかし、授業科目が基準を満たしており、その上で改善が求められる場合は、補助金には影響がないと思われる。

* 評価結果が、入学希望者の数に影響を及ぼしますか。

影響が出ると思われる。高校の進路指導者、高校生やその保護者などは、大学の格付けにより入学する大学を決めることになる可能性はある。しかし、最近では、経費削減のため自宅から通う学生が増えたため、医学部に関しては選択の余地はないようである。

* 在校生は QAA や HEFCE の結果を見て、授業や指導教官を選びますか。

学部生に関しては、個々の教員の評価は公表されていない。大学院生の授業に関しては、個々の教員の授業評価が公表されるので、評判のいい授業には学生が集まり評判の悪い授業には学生が来なくなる。

* 評価の良い優秀な教員の表彰、報償、昇進はあるのでしょうか。

直接的にはありません。しかし、QAA で高く評価されるような教官は学内でも既に高い評価を受け、昇進しているケースが多い。従来、昇進は教育業績ではなく、研究業績で決まっていた。しかし、2003年1月の高等教育白書 (White Paper on Higher Education) により、教育業績を重視する方向性が示された。

* 評価の悪い教員への指導、訓告および懲戒は行われますか。

批判自体がすでに十分処罰に匹敵している。教え方に対して厳しい評価を受けた教員、あるいは、担当している教科に対して厳しい評価を受けた教員は、当然、授業改善をしようとするであろう。大学組織としては、昇進の際に良い評価を考慮するだろうし、そのような教員が教育技術を改善しようとするのを手助けすることが肝心である。イギリスにおいては、人を処罰する習慣はなく、その人がいい方向に向かうのを手助けするのである。

* QAA のそれぞれの評価項目で高い評価 (high grade) を得るためにどのような取り組みをしていますか。

1. カリキュラムの構想、内容、組立 (design, content and organization) は、大学内では、誰、あるいはどんな組織が考えていますか。

新しい QAA の視察では、学部の各学科がそのカリキュラムのデザインや内容の運営に責任を持つということになっている。ただし、学科の案は、“programme specifications” と呼ばれる規定の書式にまとめられ、それをもとに学外者の意見を聞き、最終的に、大学の学術審議会で承認されなくてはならない。QAA は、この学部が提出した“programme specifications” に書かれている目的と目標が達成されているかどうか評価することになる。

KCL には10学科あるが、すべて Education Committee によって運営されている。この委員は、学部長が決める。この委員と学部長が各コースを運営するスタッフを選出する。

2. その人物あるいは組織にどれくらいの権限があるのですか。

School and Education Committee の長が授業科目の責任者の権限の範囲を決める。それぞれの授業科目の責任者は、必要に応じて Education Committee や Dean に助言を求める。

3. 外部評価の結果を学内にどのようにして周知させていますか。

ウェブサイト公表する。印刷物も回覧し意見を求める。大学ニューズレターに際だった結果は載せる。

4. 改善案をどのようにして学内に徹底させていますか。

それぞれの学部の「教務委員会」School's Education Committee で話し合わせ、そこから出された改善案は、「教育改善委員長」Head of Quality によって検証され、その結果が「教務委員会」に報告される。

5. 教育技術改善のためには学内でどのような取り組みをしていますか。

TIP (Teaching Improvement Programmes) という教授法改善のための授業を行っている。

● 授業開放や授業参観を行っていますか。

KILT によって既に準備段階に入ってお

り、次の QAA までにはいくつかの学部が取り入れる。

- カリキュラム改善，教育技術改善，および学生サービス向上のセミナーあるいはワークショップを開いていますか。それは、どのようなものですか。

実施している。現在，医学部の医学教育学講座が運営している。

- 学内の教員同士で教育技術向上のための協力を行っていますか。

教員によって様々。医学部では従来，教員が研究業績を重視しそのぶん教育を軽視してきたので，教員は教育技術改善のコースをあまり受けたがらない。

6. 学生の達成度としては，どのようなものを目標として設定していますか。具体的に，いくつか授業ごとに設定目標例を教えてください。

授業は，コース概要に書かれていたとおりの“目標と目的”の達成を目指さなければならぬ。学生は，試験で十分な成績を修めなくてはならない。

7. 図書館サービス，パソコン端末利用開放サービスに関して学習支援設備の充実度は？

医学部では，学生寮などにも端末を設けているが，利用者の増加で，不足気味。多くの学生は自分のパソコンを持っている。今後，図書館などが利用時間を延長することによって対応可能かも。IT や図書館の効率的な利用は可能はずである。

8. 授業の質を高めるための最大の工夫は？

学生による授業評価や教職員から寄せられた意見を建設的に採り入れて改善を続けること。これは，フィードバックループを閉じて行くことである。評価については教育運営グループや学生団体が議論し，教育改善委員長はフィードバックがうまくいっているかをモニターする。

- *外部評価の結果をどのように学内に周知させていますか。

大学のウェブサイトの利用

- *改善案をどのように学内に徹底させていますか。改革推進者の権限は。強制権はありますか。

これは各学科で任命される教育改善委員長の責任の元に実施される。この役についたもの

は，毎年，学部長と「医学教育委員会」Medical Education Committee に教育に関する年間報告書を提出しなくてはならない。そこに授業評価や評価に対する対応，結果としての授業改善の項目もある。

- *外部評価をうけて，改善を行うときの手順を教えてください。

教務委員会で話し合われ，一定期間の後に改善結果が検討される。

- *初等・中等教育機関でのカリキュラムと大学のカリキュラムの連携はありますか。あるとすれば，誰がどのように連携させていますか。

卒業認定試験委員会が，大学によって運営されているが，近年，これらの標準化が試みられ委員会が統合されている。

- *各学問別に，社会での実際の要求を実地調査した上でのカリキュラム改善を行っていますか。

ほとんど行っていない。これらはむしろ，政府機関などによって行われている。例えば，医学に関しては“General Medical Council”，法学部に関しては“The Law Society”。

- *しているとしたら，どんな対象にどのような質問を行っているのですか。どのように調査していますか。

国民の一部。OPCS や統計局，家庭局，national research surveys などが必要に応じて行っている。

- *学生による授業評価はだれが調査するのですか。QAA，大学，それとも学生自身？ どのような形式で？ ポイント項目は？

医学部では，各学年あるいは各カリキュラムモジュールや試験についての委員会がそれぞれ担当する。KCL では，毎年，学生委員会（SMEC）が調査項目を選定して調査を行う。たとえば医療相談員による学生サポートに満足したかなど。

- *学生評価（Feedback）をどれだけ尊重していますか。

医学部では学生からのフィードバックに関しては特に，きわめて真摯に受け止めている。

- *HEFCE は，各大学から提出された資料を基に大学の研究者の業績を判断していますが，それは，どのような書式の報告書ですか。

例えば臨床医学・基礎医学など，領域全体に

関する評価の点数と、それぞれの分野の点数とがある。全体に関する評価の点数は大学の予算の一部を決める上で重要である。

* 各教員の業績評価はどのようにしていますか。評価項目および評価基準はどのようなものですか？

各研究者が、大学の報告書の一部としてそれぞれの業績を提出する。この報告は、大学が研究者を評価するのにしばしば用いられる。

* 分野ごとに評価項目や基準が違うはずですが、どのように評価項目・基準を定めていますか。

これは、臨床系の研究者が大いに不安に感じている問題である。評価報告はあらゆる分野に適するように試みられているが、フェアではないという感じを抱くものが多い。つまり、小さな領域の方が大きな領域よりも有利だという印象が強い。

* 全教員に研究及び教育両面の実績を求めているのですか。それとも、研究中心、教育中心と職能を分けていますか。

臨床系の研究者は研究・教育・臨床の分野が乖離しており、その全てに優れた業績を残すのは不可能であろう。KCLの様な大学は研究指向で、研究者が教育もしていると認識されている。90%以上の研究者は5点か5*点にランクされている。これは、教育が研究と密接につながっていなかったり、専攻科目実施に大きな組織を必要とするような医学部では不可能なことだと、我々の多くは思っている。最新の白書は、将来的に教育へのウエイトを増やすとしている。現実には、多くの研究者は教育はわずかしかせておらず、教育に大きく貢献し研究をしない者はわずかである。

〈入学者選抜のプロセスについて〉

* どのようなプロセスで入学者選抜をしていますか。

受験生がUCASに提出した願書を、経験豊富な審査員が我々の提示するクライテリアに合致しているかどうかを1~3で採点する。スコアが「1」の者は面接に進み、スコアが「2」の者は別の審査員が審査して「1」に評価されれば面接になる。面接は20分間、倫理問題についての討論を含む。

* 大学独自に入學試験、面接は行っていますか。

面接は行っているが試験は課していない。

* 入学希望者は、Application formを入学希望大学及びUCAS (the UK's central universities application organization) に送ることとあるが、UCASは入学者のレベルをどのような基準で判断するのでしょうか。それぞれの大学は独自に入学者の選別は行わないのか。その権限はないのでしょうか。

入学希望者は願書をUCASに送り、そこが対応する書式を大学に送る。UCASがこの過程をオーガナイズする主体である。

* 入学基準 (Admission policy—entrance qualification required for 受験生) はどんなものか。

AレベルでABB, 一つはC以上でASレベル。化学と生物学はASレベル以上。案内書には評価方法が記載されている。

* 高校までの学業成績をどのように利用していますか。

試験の成績が願書の書式に含まれている。普通校長による学業成績証明が添付されている。

* 入学生確保のためにどのような広報活動を行っていますか。

生徒たちのために案内書を作成している。我々は360人の入学を目標としている。そのうち7.5%は、外国からの留学生を受け入れなくてはならない。もし入学者が少なければ収入源となる。我々は生徒たちのために高校に出向いて説明会をし、オープンキャンパスを実施し、MedLinkの様な集会にも出向く。

Appendix 1

〈QAAについて〉

QAAとは、大学の単位授与資格を審査し、高等教育の質を高めるために1977年に設立された独立機関である。それまでは、枢密院がその任に当たっていたが、政府からも大学からも独立した機関で審査するのが妥当との判断により、独自の機関が設置されたのである。本部は、イギリス中西部のGloucesterにあり、14人の委員と100人を超すスタッフから組織されている。14人の委員の内訳は、大学長が4名、高等教育基金組織から4名、残りの6名は、産業、通商、経済など様々な分野からの学外有識者が選ばれる。全国の大学を5年に1度の割合で査察し報告することを目指した。

1977年から始まった第一次QAA査察は、個々の授業の質まで調査しようとしたが、実際は、各大学ともいくつかの授業参観を行ったものの、多くは書類審査

となった。調査予定がかなり前に予告されるため、各大学の該当学部は十分に対策がとれた。この査察の問題点としては、査察される大学は、要求された書類をそろえるのに膨大な時間と労力が取られるということにあった。残念ながら、その割に、必ずしも日頃の授業改善努力を正確に計れるものとはならなかった。6項目4点の採点の仕方にも問題があった。評点は、各大学が項目ごとに定めた到達目標をいかに実現できたかを基準にしてつけられた。従って、同じ様な授業を持っていても、到達目標が違えば、評価点も違ってくる。ましてや、違った授業同士の比較はできない。QAA自体が、総合点の単純比較は無意味であるという報告書を出している。QAAとしては、①カリキュラム内容、②教授法並びに評価方法、③学生の学習目的到達度、④学生支援と指導、⑤学習支援設備、⑥教育改善の取り組みの6項目の中で、①②が他より需要であると指摘している。しかし、総合点だけの比較をすると、カリキュラムに決定的な不備があり最低の1点が付けられた大学と、カリキュラムはすばらしいが、③④⑤で、3点がついた大学が同じ総合点になるということがあるのだ。数字の落とし穴である。本来、QAAは、大学間の比較をするためのものではなく、それぞれの大学、それぞれの教員が個々の授業を改善するために行ったのであるが、新聞雑誌がすぐにその数字を大学のランキングに用いてしまった。当初、受験生、その保護者、進路指導者、および企業などもこの数字に敏感であったが、今では、QAAの総合点に対する見方も変わってきている。現在の受験生は、できれば都会に出たい、経済的に苦しい場合は、地元志向になるというQAAなどとは違った要素により大学を選択している傾向にあるというエセックス大学のTony Rich氏の言葉を思い出すべきであろう。イギリス政府は、相変わらず、教育改革に熱心で、さらに教育の質を改善するよう大学に求めている。QAA自体も、1997年から行ってきた現在のシステムには、様々な問題があり、5年で1クール終わったところで、制度改革を行った。でも今年から新しい査察法を導入した。Institutional Auditである。今までの査察は、個々の授業科目の内容吟味、及び、いくつかの授業参観も含まれていたが、新しいシステムでは、個々の授業の質的向上は各大学に任せて、むしろ、大学がどのように教育改善のためのシステムを作り上げ、それがいかに有効に機能しているかを調査する方向に調査対象が代わっている。まだ具体的にこの査察を受けた大学はないので、推測の

域を出ないが、今年秋にこの査察を受けるエセックス大学によると、今回は、どの学部の取り組みを調査されるか事前に知らされないのではないかとのことであった。つまり、今までのように、指定された学部学科だけが、査察に備えて、授業改善の対策を取るのではなく、常に大学が全学として教育改善に取り組んでいる姿勢を見せておかないといけないわけである。大学が抱える問題は日本もイギリスも類似している。授業改革に関しては、イギリスが日本より半歩先を行っている感じであるが、イギリスもまだどのようになれば、大学の教育改革がうまく進むのか模索中である。新しいQAAの取り組みも含め、今後のイギリスの教育改革の取り組みを注意深く見守ることは、日本で教育改革を行う上でも大いに参考になると思われる。

イギリスの大学で今一番問題となっているのは、少子化とEqual Opportunityの問題であろう。この問題への一つの解決策として、イギリス政府は、18歳から30歳までの50%を大学に受け入れるという方針を出した。また、大学には、偏った私立有名校からのみ入学を取らないように指導を行った。これに従わない場合は罰金が課せられるそうだ。このため、各大学は入学定員を増やし、得点が低くても公立高校出身の学生を受け入れなくてはならなくなった。これは、相対的にどの大学でも学力の低下を引き起こしている。確かに金銭的に恵まれない学生たちにも大学で学ぶチャンス平等に与えようと言う趣旨はよいものであるが、女性や、少数民族、障害者に光を当てた反面、英語圏の白人男性が不利益を被るという事態が生じている。学生定員を大幅に増やし、公立私立から平等に学生を受け入れるように強制したことで、各大学のレベルが下がり、個性が打ち出せなくなっているのもきわめて大きな問題で、数年後には、もっと深刻な事態を引き起こしそうである。このような理想と現実の乖離は、どのような改革にもつきものであるが、戦後最大の教育改革を実施しようとしている日本は、イギリスのこのような躓きから正しい教訓を得て、よりよい改革の方向を見つけるべきであろう。

Appendix 2

<TOEFL に関して>

TOEFLとは、公式サイト (<http://www.cieej.or.jp/TOEFL/index.html>) の説明によると、次のようなテストである。

TOEFLは、米国の非営利教育団体 The College

Board および The Graduate Record Examinations Board の委託で、主に米国、カナダの大学留学を希望する外国人学生が大学での授業についていける英語力を有しているかを評価するため、1964年に米国非営利団体である Educational Testing Service (以下 ETS) が開発しました。

PBT は、マークシート方式で実施され、Listening Comprehension/Structure and Written Expression/Reading Comprehension の3セクションおよび TWE (The Test of Written English) で構成されています。トータルスコアは310~677で表記され、TWE のスコアは含まれません。TWE は独立した形で採点され、TOEFL スコアレポートに併記されます。現在、アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアなど英語圏の大学2,400校以上が英語を母国語としない入学申請者に対し、TOEFL スコアの提出を要求しているのに加え、各種の政府機関、奨学金プログラムなども TOEFL スコアを使用しています。

以上は、ペーパーテスト方式の TOEFL の説明であるが、TOEFL はコンピュータ受験も普及している。コンピュータ受験の得点範囲は、40-300である。コンピュータによるテストは次のような構成になっており、Writing も含まれている。

セクション名	問題数	回答時間
Listening	30-49	40-60分
Structure	20-25	15-20分
Reading	44-55	70-90分
Writing	1	30分

愛媛大学の平成14年度入学生（法文学部と理学部生物地球圏科学科）に対して、平成14年4月10日~11日に試験的に実施した TOEIC 模試の平均点（総受験者数399人）は、491点であった。これは、ペーパー式の TOEFL で言えば、450点ぐらいに相当する。このことを考えると、ロンドン大学の入学基準となる TOEFL 540点というのが、いかに高い基準であるか分かるであろう。

Appendix 3

<資料>

University of Essex

Quality Assurance and Enhancement

<http://www.essex.ac.uk/quality/>

Staff Development

<http://www.essex.ac.uk/staffdev/>

University of London

KILT

(King's Institute of Learning & Teaching)

<http://www.kcl.ac.uk/kilt/>

SOAS

(School of Oriental and African Studies)

<http://www.SOAS.ac.uk/>

QAA

(Quality Assurance Agency for Higher Education)

<http://www.QAA.ac.uk/>

HEFCE

(The Higher Education Funding Council for England)

<http://www.HEFCE.ac.uk/>